

環境問題についての教科書はまだない。しかしそれを待ち望んでいる人は多い。それは学校で環境について教える立場にある人たちだけでなく、環境問題に関係ある研究や行政にたずさわっている人たち、そして直接の関係はないにせよ、何らかの経路で影響を与えることになる産業活動を行っている人たちである。そしてそれよりも、恐らく一番熱心に待ち望んでいるのは、交通手段を使ったり、家で暖房や冷房を使ったり、そして食事をする一般の人たち、即ちすべての人が、生活という場面で行動についての意志決定をする場面で、その決定が地球環境にどんな影響を与えるのかを知りたがっているのである。

しかし、それは非常に複雑な問題で、行動の指針を与えてくれるような手引書はおろか、問題の本質を明らかにしてくれる本もない。すなわち教科書がないのである。

その意味で、本書はそのような教科書の出現を予感させる最初の本であると言ってよいだろう。扱っているのは地球環境問題全体ではなく、地球温暖化である。しかし大学院学生が専門家を訪問して質問し、それに専門家が答えの形式で書かれた本書は、その形式から言っても、また選んだ専門家およびその章構成から言っても、環境問題の骨格を的確に把握していると考えられるのである。

その理由の第一として、温暖化についての今までの出来事を説明する形をとりつつ、科学者の観測、現象の予測、それにもとづく国際的とりきめについての紹介を前半とし、後半が問題解決のための科学技術的研究という構成になっていることがあげられる。それは単に歴史的経過を忠実に述べるという意義をもつだけでなく、この構成が、科学が地球環境問題にどのように貢献するか。その方法について、唯一今までに成功した例に依拠しながら明快に伝えているからである。それは科学研究の新しい形式、私はそれをシナリオ駆動型研究と呼んでいるが、それがここで章の構成として表現されており、読者に科学の世界で何が起きているかを理解させることとなっている。

第二の理由としては、訪問した科学者たちの専門家としての水準の高さがあるが、それだけでなく専門家たちが科学者の立場をしっかりと守って述べている点がある。地球環境問題の書は、どちらかと言えば「警告の書」であったり、あまり根拠のない行動提案の書であったりすることが多い。それはそれで意味を持つが、前述の教科書へと発展する可能性を自ら放棄していると言わざるを得ない。本書の語りは、科学的と言ってもデータを並べるだけのものではなく、人間味のある言葉で、自分の考え方も同時に述べている。しかし、それは読者が行動の意志決定をする上で、参考になるが強制はしない語りになっていて、科学者が行動者に対してする助言のよき典型を示しているのである。

もちろん、本書はこれらの形式上のことだけでなく、温暖化にかかわる科学的説明が豊富に述べられていて、その意味で有益な本である。科学的知識が、特定の解釈によって予見を強制することなく人々に伝えられること、しかもそれが歴史を経て定着した知識を越えて、現代生み出されつつある知識にも及ぶこと、それが今後の教科書のあるべき姿だと私は考えているが、その可能性を示唆するものとして本書の試みは大変意義深いものであると思われる。恐らく最初に述べた多様な人たちは、本書から自分の行動の根拠を自ら創出することができるのではないだろうか。